

刊行によせて

国際常民文化研究機構が主催する国際シンポジウムも第1回「海民・海域史からみた人類文化」、第2回「“モノ”語り－民具・物質文化からみる人類文化」に続き、今回の「“カラダ”が語る人類文化－形質から文化まで－」で第3回を数えるに至りました。機構の設立目的は、拠点である日本常民文化研究所の漁業史・民具研究、COEプロジェクト「人類文化研究のための非文字資料の体系化」を継承、さらに展開し、国家や民族の枠組みを超え、いずれの社会においても大多数を占める庶民層を「常民」として概念化し、等身大の生活文化を総合的に調査・研究・分析する方法論を確立し、多文化共生社会といわれる現代社会にあって、真の国際理解・異文化理解に資するところにあります。

今回は、初日の馬場悠男・宮家準両氏による基調講演に続き、パネルディスカッションでは、人の身体の資料性を、カラダで読む、表す、伝えるという3つの視点から、自然人類学・文化人類学・民俗学・宗教学・舞踊学それぞれの学問分野、研究視角から提示してもらい、2日目の「アジア祭祀芸能の比較研究」グループの公開研究会では、東アジアにおける船送り儀礼を具体的な題材にして、祭祀者・演者・巫者として自然やカミと交流する身体の表象、役割の意味を多面的に論じてもらう二部構成を取りました。その間に、各発表と会場の聴衆とのカラダを通しての共振を促す試みとして、韓国から巫堂一行に來日していただき、巫儀のパフォーマンスを挟みました。この構成で、資料として示されるカラダの可能性とそのもつ意味を身体全体で感じて欲しいと願いました。会場には巫堂の跳躍の波動が伝わり、チャング・両面太鼓をはじめとする音声が響きました。このような本格的な巫儀の公演が学術会議の場で行われた例は少ないでしょう。加えて、一行は、神図も含め、実演で使用した資料のすべてを学術資料として寄贈して残されました。この場を借りて重ねて厚く感謝の意を表したいと思います。

非文字資料として人間の“カラダ”は、生身の身体そのものから挙措動作、心の動きまで、その対象範囲は広範です。近年その遺伝子情報の読み取りから人類の系譜についても明らかになってきました。COEプロジェクトでは、“歩く”動作から人類文化をとらえる実験展示も試みました。細分化された人のカラダ、それに伴い人を対象化した学問も細分化している現在、改めて人間のカラダを全体的にとらえる必要性が高まっているといえます。これはまた、自然科学と人文科学の融合を志向した日本常民文化研究所の創設者、渋沢敬三の願望にも連なることになります。

本書は、2日間にわたる国際シンポジウム、公開研究会の報告集ですが、それぞれの内容をクロスさせることに拠り、非文字資料としての人のカラダから何が見え、そして分かるのか、本書を手にとられたみなさまが、その像を脳裏に結ぶきっかけになるならばこれ以上の幸いはないと願っています。

2012年 7月 吉日

国際常民文化研究機構運営委員長
神奈川大学日本常民文化研究所長
佐野 賢治